

大田区自立支援協議会 第4回相談支援部会要旨

文責：赤羽委員、事務局

(1) 会議の名称	大田区自立支援協議会 第4回相談支援部会															
(2) 開催日時	令和5年11月8日(水) 9:30~12:00															
(3) 開催場所	障がい者総合サポートセンター5階 多目的室															
(4) 出席した委員、事務局等	委員 <敬称略>															
	<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 25%;">神作 彩子</td> <td style="width: 25%;">古怒田 幸子</td> <td style="width: 25%;">椿山 通子</td> <td style="width: 25%;">山本 利寛</td> <td style="width: 20%;">赤羽 知映</td> </tr> <tr> <td>大窪 恒</td> <td>大類 信裕</td> <td>貝森 はるみ</td> <td>草野 牧子</td> <td>小嶋 愛斗</td> </tr> <tr> <td>清野 弘子</td> <td>三浦 大輔</td> <td>森田 友哉</td> <td></td> <td></td> </tr> </table>	神作 彩子	古怒田 幸子	椿山 通子	山本 利寛	赤羽 知映	大窪 恒	大類 信裕	貝森 はるみ	草野 牧子	小嶋 愛斗	清野 弘子	三浦 大輔	森田 友哉		
	神作 彩子	古怒田 幸子	椿山 通子	山本 利寛	赤羽 知映											
	大窪 恒	大類 信裕	貝森 はるみ	草野 牧子	小嶋 愛斗											
	清野 弘子	三浦 大輔	森田 友哉													
	オブザーバー：渡邊 伸幸、徳留 敦子、七尾 尚之、高柳 茂泰、森田 好美、永谷 百恵、西岡 寿恵															
事務局：須藤 成政、酒井 史穂、阿部 朝奈																
欠席者：稗田 潤、宮澤 創、呉 ルミ、筒井 寛孝、後藤 憲治、村田 亮、小川 幹夫、渡部 尚																
(5) 内容・要旨	<p>1 連絡確認事項</p> <p>(1) 司会・書記の確認 須藤係長、神作部会長が司会、書記は赤羽委員と確認した。</p> <p>(2) 議事録・意見だしカードの確認 意見だしカードは部会のみ取り扱いとなる。</p> <p>(3) 運営会議・交流会の報告</p> <p>●運営会議について 10月26日に運営会議を開催した。防災・あんしん部会は町歩きを実施予定、地域生活部会は情報収集に関するアンケートを検討中、相談支援部会は相談カフェを開催予定と報告した。 次回の協議会だよりは10月2日に行った交流会についての記事。交流会に参加いただいた方に本稿に限り記事の作成をお願いする。 3月6日に本会を実施予定。詳細は検討中。次回運営会議は12月中旬ごろ実施予定。</p> <p>●交流会について 目的は協議会3つの部会を超えて委員同士が交流し、お互いの活動内容を知ることで大田区自立支援協議会全体の繋がりを作る。交流会を受け、2年任期の2年目には研修を検討中。 今回の交流会テーマは「安心」。安心とは何かをグループワークした。災害時の安心、安心のための支援者同士の連携などの話があった。人との繋がりが安心になる。不安は生きていればあるものなので、少しでも安心にしていけるようにしたいという話があった。以下参加者の感想。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループに当事者会の方が多かった。不安は無くならないが、みんなで考えるだけでも少し軽くなる。他グループの話も参考になった。 ・バランスよくグループが振り分けられていた。部会を越えて話し、それぞれが専門としている障がい分野で、何に注目するか視点の違いがあり参考になった。 ・「わからない」を「わかる」ようにすると安心に繋がる。「この人に聞けばわかる」という相談相手を知り、繋がるのが大事。アイスブレイクで趣味の話をする事で繋がりができることもあるので、仕事だけに捉われない繋がり方ができるとよい。 															

2 本日の検討課題

(1) 連携について考える

昨年度は医療と福祉の連携がテーマだった。今期は医療に限らず、様々な分野との連携がテーマ。昨今、課題が多岐にわたり、複雑化している。様々なかたちの支援者同士の連携が課題解決に向けての必要となる。そこで「連携」という言葉を考え、どのような状態のことか、整理したい。

<連携とは>以下、各委員の意見抜粋。

- ・役割が異なる2つ以上の組織がお互いできることを行う。同じ役割を持った人同士でも意見を交換して知見を深める。何か起こる前に情報共有する。
- ・共通目的を持った複数の人がお互いの役割を尊重しながら繋がっていくこと。
- ・相手の期待をイメージし、負担を分散できること。
- ・相談できる人、場がある。話すことで心配事が少なくなること。
- ・支援機関プラス保護者、当事者も含めて共有できていること。
- ・各方面から検討しあいながら当事者にとって何が一番良いか考えて行動すること。
- ・本人家族を中心にして、複数でかかわること。
- ・役割が違って同じ熱量で関わっていけること。
- ・各支援者の立ち位置があるので、共通目的がある場合もない場合もある。
- ・途切れない情報共有、多職種で関わる。それぞれの役割の理解も必要。
- ・今ある状態から立場、専門職の見立てがあるなかで一步踏み出すこと。

(2) 事例から見えてきた抽出課題

前回検討した事例について説明後、グループで検討後、発表した。

(ア) 表面に出ていない課題

C 課題があることに本人、家族が気づいていない。現状のなかで家族が今後のイメージをできていない。

B 本人が成人になると児童関係の手当てが貰えなくなるため経済的に厳しくなりそう。おそらく医療機関や相談支援事業所も変わるため、切れ目のない支援が必要。また、本人が就労継続支援B型に行く意思があるか、今後の家族の方針について意見の相違も気になる。父のアルコール依存も具体的な実態が不明。

A 経済的な懸念がある。世帯が起こりうるデメリットを予測できているか不明。障害年金などの制度を知っているか。支援チームの誰かが伝えているだろうという思い込みや支援者の知識量・スキルで本人に伝えられる内容に差が出てしまうことが課題。

(イ) 予防的な連携

D 支援者として困りごとを出してもらえる関係づくりが必要。母あるいは父の両親から、地域包括支援センターを入り口にできる可能性あり。各家族の支援者を知り、関係者会議を開けるか。母の言語での相談相手。生活困窮自立支援制度、JOBOTAへの相談も必要か。教育関係との連携も必要か。必ずどこかで問題が顕在化すると想定されるので予防的な面として何か繋がっておきたい。

C 本人たちが課題に気づいていないと考える。課題を伝えるのは誰かが課題。介入のタイミングを見極めておく。現段階では連携先は広げずに距離をとっておく。ただし、母、姉のSOSを見逃さないように。18歳での切り替えも介入のきっかけになるか。

B 保護者の相談場所の確保が必要。本人の卒業後の支援についてなど将来的な見通しがわかるようにする。現状生活できている家庭なので、危機的な状況になったときに介入すると思うが、それからの連携では遅い。問題がおきてからの連携ではなく、重層的支援会議で地盤を固めていけたらいいと思う。

(ウ) 連携の際にどこが主体となるか

A この家族に身近な機関が連携の中心になる。ただし、本格的な連携前に情報を共有する中心のような主体があると良い。

B 主体を決めることも大切だが、動かなければならないときに、どこかが主体となりながら繋がって重なっていくイメージをもっておくと、それが連携の本質とも言える。

D あえて主体は作らなくてもよいのでは。主体ではなく、入口的な役割で、関係者が集まったところで役割分担をすればよいと考える。決めてしまうと、誰かがやってくれるだろうと、動きづらくなってしまう可能性あり。

3 今回決定事項及び次回検討事項の確認

次回、相談支援つながるカフェ実施。相談を受ける支援者同士で支援に関する。情報交換をしながら協議会発信でつながる機会を作る。社会福祉協議会、JOBOTA、SAPOTA、フラットおおた、地域包括支援センター、ケアマネジャー、医療ソーシャルワーカー、行政（生活福祉課、子育て支援課、子ども家庭支援センター、保育サービス課、教育センター）、国際都市おおた（多言語相談窓口）等に声をかけている。

次回日程 令和5年12月13日（水）9時30分～12時00分
障がい者総合サポートセンター 5階 多目的室